連載〈まつやま　人・彩時記〉⑬

模範村・余土の教育を推進した名校長

村上壷天子

愛媛師範代用附属小学校長
俳句・書・画に親しんだ文化人

元松山市立素鵞小学校長
伊予史談会会員
上岡　治郎

村上万寿男校長（号・壷天子）
代用附属小学校時代（昭2～昭13）

一、模範村の伝統

明治31年、村民の懇請で郷里余土村の村長に就任した森盲天外は、盲目の身でありながらその在職中の10年間を、貧村余土村の新しい村づくりに心血を注いだのである。

まず精密な全村の実態調査を実施し、それを村の産業・教育・文化の各方面に活用して、余土村をして一躍天下の模範村たらしめたのである。

㊤「余土村是」実行のために、高等科の子供の日曜貯金集金出発式
㊦頭陀袋をかけて、小作保護のための寄付米集めをする森盲天外村長

―「余土村是」―
①小学校教育の改善　④勤倹貯蓄
②青年教育の実施　⑤共同購入
③耕地の改良　⑥小作保護
⑦副業の奨励

二、代用附属小学校開校

余土村立余土尋常高等小学校を愛媛県師範学校の代用附属小学校とする必要性を説き、大正9年4月開校に導いたのは、時の師範学校長山路一遊である。

その理由の第一は、地域に密着した教員を養成するためには、農村の児童を対象とした教育実習校が必要であるということ。

第二は、松山に近く、交通が便利であり、特に盲目の村長森盲天外やその補佐役鶴本房五郎などの人材が一体となって、天下の模範村に育て上げた伝統が、現在も息づいているということである。

こうして県も努力し、余土村も承諾して県下で三番目の附属小学校が開校したのである。

三、村上万寿男校長

村上万寿男は、明治20年12月1日、越智郡大山村泊（現吉海町）に父重松藤太、母マサの次男として誕生。（俳号・壷天子）

明治36年4月、愛媛県師範学校（現在の愛媛大学教育学部）に入学する。そして寄宿舎では俳句会「錚々会」に入会し、垣生から俳句の指導に来られていた村上霽月（本名半太郎）の指導を受ける。そして万寿男が、昭和2年3月、代用附属余土小学校長として着任以後は、霽月・壷天子として終生の友となる。

次に村上姓であるが、万寿男が卒業2年目に大山村余所国の笹の井酒造業村上家の分家に懇望されて、村上チカエと結婚し村上家を継いだのである。

ところで万寿男は師範卒業四年目からは、余所国・弓削・東伯方の小学校長を歴任し、越智郡はもとより県内きっての大校長として昭和2年4月、代用附属になってから4人目の校長として迎えられたのである。

四、余土小の教育研究

村上校長の時代になると、男女師範交互の研究大会に、余土小も加わり、三年に一度、自分の学校が当番校になって愛媛教育研究会を実施した。そのため余土小で言えば次のような計画となる。

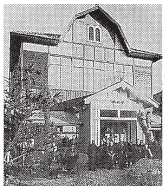
①昭和2年、**第7回愛媛教育研究大会**
「如何にして農村に於ける小学校教育の使命を果たすべきか」

②昭和5年、**第10回愛媛教育研究大会**
「郷土に立脚したる教育の実際」
（元余土村長　鶴本房五郎氏講演）

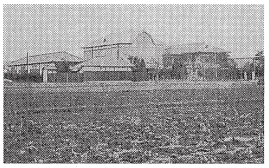
③昭和8年、**第13回愛媛教育研究大会**
「教育内容改善の実際」
「全村教育の実際」

余土小が会場校になるのはこの3回で終了したけれども、昭和5年に「郷土教育の理論と実際」という本を出版し、全国的にも高く評価されたのである。

（昭和初期の余土小学校）



旧本館落成式当日
昭和2年12月



村上校長と校舎全景

なお、当時在職していた教員の文章で、その意気込みを紹介する。

「私が余土代用附属小学校に赴任したのは昭和8年、22歳の春で受持は3年女子29名であった。

当時の余土村は、名村長森盲天外の業績を源流とする協力一致の美風が流れ、学校は全村こぞって郷土教育の研究と実践に取組んでいた。郷土の現状を正しく知り、ふるさとを愛し村おこしの意識を養うことは、教育の根本でもあった。特に不況のドン底にあった農村の自力更生は、わが国緊急の課題でもあった。

壷天子村上校長は、自分で「郷土読本」を執筆し、ガリ版の原紙を自分で切り、この本を生徒たちに読ませた。…（中略）…

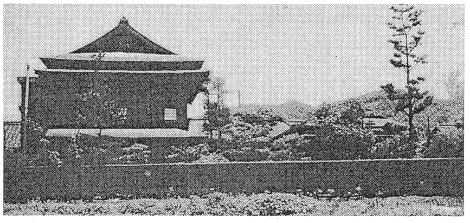
私たち全職員も、各教科毎に系統案を作って指導した。雨が降っても傘をさして校外指導、苗代に虫がわけば生徒をつれて村田の害虫とりに出かけた。村も教師もそんな教育にプライドを持っていた。」

（曽我静雄・明徳短大教授）

師範村・余土の教育を推進した名校長

Kotenshi Murakami

五、退職後の壷天子
―句碑建立―

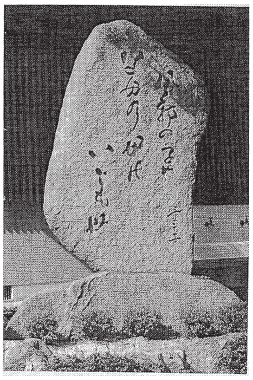

松山大空襲で焼失した旧住宅

余土代用附属を郷土教育のメッカとして全国に知らしめ、県下を義弟森光繁と共に講演して回った想い出を胸に、壷天子は現職を退く。

そして昭和9年、松山を永住の地と定めて建てた城北の地清水町の住宅を拠点に、画に、書に、俳句に、そして陶芸を楽しみながら精進して余生を送る事にした。

しかしこの家も昭和20年7月26日の松山大空襲で焼失、やむなく郷里の大島余所国に帰り住み、芸術活動を行い、26年12月、句集「綿津見」を刊行する。

そしてこの出版が契機となって村上万寿男校長を敬慕する余土小の教員永野正、高須賀義男等が中心となり、余土の有志や父兄に呼びかけて句碑建立となったのである。


風邪の子や　父母の母の　いとも母
（壷天子）

〈句碑建立趣意書〉

…余土村における教育功労者として村上万寿男先生の句碑建立を左記により発企いたしました。

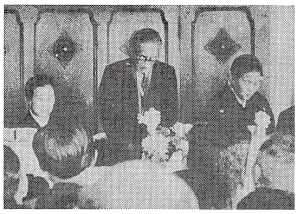
先生は昭和二年以降十一年の長きに亘り余土小学校長として子弟の教育に専念するとともに郷土教育、全村教育に不滅の業績をあげ村の発展に貢献せられた事は御承知の通りであります。

今日余土村の第一線に立って奮闘活躍中の青年層の多くが直接間接に先生の薫陶を受けたものであり、これ等青壮年の力によってこそ村の新たなる発展と国家の再建が期待されるのであります。又先生の樹立された全村教育は、今日においても脈々としてその生命を保つのみならず、この教育こそ独立後における村の発展と国家の興隆に寄与するものであることを確信してやみません。ここに先生の教育の功績に対し感謝と敬意を捧げるとともに、あの崇高な御人格と趣味豊かにして品位高き御風格に対して景仰思慕の情を禁じ得ないのであります。

たまたま今般先生五十年の俳諧生活の結晶として句集「綿津見」が刊行せられました。これを機会に私どもは先生の三十余年に亘る教育生活終焉の地たる余土小学校校庭に句碑を建て、その徳望を慕い風格を偲ぶとともに、偉大な教育業績を永遠に讃仰したいと思うのであります。

かくてこの恩師の碑が私どもの心の糧となり活動の力となるとともに、新しき村の道標となり新教育の指針ともなって社会に光を与え得ますれば、更に建碑の意義を加え光彩を添えることとなり幸甚の至に存ずるのであります。（以下略）

六、愛媛県教育文化賞受賞


受賞式典会場にて

昭和37年11月3日の文化の日に、村上万寿男校長は教育文化賞を受賞する。

特に小学校経営上の功績が認められた教師の第一号でもあり、戦前・戦中を通じて、彼の代用附属小学校での学校経営が如何に高く評価されていたかを伺い知ることが出来るのである。

次にその功績状を紹介する。

「村上万寿男、明治四十年愛媛県公立学校訓導となり、在職三十一年に及ぶ、その間本県の教育界向上発展に寄与するところ顕著なものがある。特に余土代用附属小学校長在任十余年にわたる実習生の指導は精魂を傾注し、幾多有能な人材の輩出をみるにいたる。さらに郷土教育、全村教育についての創意と研究は広く県下に普及して成果をあげ、今日における社会教育の先駆者としてその業績は大きい。

昭和十三年退職後は「壷天子」と号し、俳画書道に精進し独自の芸術境を拓き、卓越せる風格をもつ作品を発表すること数回に及び好評を博す。さらに郷土の書画、俳人等の顕彰のために努力をいたし愛媛の文化向上のために努力するところ大なるものがある。」

七、雅号は「壷天子」

雅号を「壷天子」と付けたのは、師範学校在学中に漢文の福泉教諭から支那の故事「壷中の天」の講義を聴いたことによる。

この故事は、小商売人が夕方商いから帰って来ると、毎日軒先につるしてある壷の中に、ポンと入って消えてしまう。そして、この壷の中は全くの別天地であり、読書・思索のような沈潜の世界を意味する、と言うことに共感を覚え、「壷中の天」の壷天の下に子を付けて「壷天子」と号したと言う。

八、退職後の壷天子年譜

昭13・3　余土小学校長辞任
〃・5　霽月と百の合作を創作。
昭14・10　東洋城の来訪で句会を始める。
昭17・4　十四王と共に「渋柿」選者
昭20・7・26　空襲で住宅を焼失する。
〃・10　郷里大島余所国に移り住む。
昭22　疎開中の野間仁根画伯と交遊
昭24・12　東洋城を大島に迎える。
昭26・12　句集「綿津見」刊行
昭27・5　余土小校庭に句碑建立
昭28・11　第1回個展今治で開催
〃・12　松山に移り住む。
昭29　松前町に草庵を造る。
昭30・7　第2回個展三越で開催（以下第6回まで於三越）
昭37・11　愛媛県教育文化賞受賞
昭39・10　俳句の師東洋城逝去
昭46・5　寿老三人展
小川千甕（九十歳）
武者小路実篤（八十五歳）
村上壷天子（八十四歳）
昭49　越智郡宮窪町名誉町民となる。
昭57　九十六歳展（於県美術館）
昭59・12・26　松山市松前町で没する。